

学校づくりの一員として

# one of them 2

続日々の雑記帳 No.38 2005. 2. 21 by yoshiki

## 身振りも口ぶりも出る

「先生、ちょっとこれ見てください。」

とM先生がここにこして一枚の紙を私に差し出しました。見ると、それはT君が社会の学習のまとめとして書いた「東近江市新聞」でした。すっきりした紙面割。一字一字きちょうめに書かれた文字。丁寧に塗り込められた新市のマーク。

「ほーっ。」と思わず感嘆の声が出ました。まわりの先生方も、

「へえーっ、これ、T君が書いたの。すごいやん。」

と驚きの声。T君が変わりつつあることはM先生や指導教員のD先生から聞いていたが、これほど素直に前向きに取り組めるようになっていたことに正直驚かされました。

金曜日も、「登校旗の先破れてたの、直してきた。」

と旗の先を見せました。見ると、たどたどしいながら黒い糸で縫ってあります。

「前、お母さんに教えてもらったし、自分で縫った。」とのこと。

そんなT君の変容ぶりに接しながら、ずっと以前に読んだ「君の可能性」(ちくま少年図書館斎藤喜博著)のことを思い出しました。

「ある心理学者はこう言っている。

人間はだれでも生まれてくるときにあらゆる要素を持って生まれてきている。勤勉な要素も、ものおしりする性質も、乱暴な要素も、……。」

ところが、その中の、一つのよい要素が表に引き出されると、他のよい要素がいもづる式に引き出され、悪い要素はかくされてしまう。逆に、はじめ悪い要素が引き出されると、他の悪い要素だけがいもづる式に引き出されて、その人間の持っているよいものはかくされて見えなくなってしまうというのである。」  
そして、その極端な例

として死刑囚島秋人あきとのことを書いている。

一島秋人は、成績はいつもクラスで一番下であり、友だちからも教師からも「低脳児」「劣等生」とばかにされていた。家庭その他にも原因があったのであろうが、島秋人は性格がひねくれ、とうとう少年院に入れられてしまった。そのあげく、強盗殺人の罪で死刑囚となってしまう。

死刑囚になった秋人は、獄中で小・中学校時代の記憶の中から、ただ一回だけ、「絵はへたくそだけど構図が良い」とみんなの前でほめられた、そのことが忘れられず吉田先生に手紙を出す。その返事の中に奥さんの短歌が入っていた。それを讀んだ秋人は、短歌とは何とよいものだろうと思ひ短歌を作り始める。秋人の短歌は、毎日歌壇賞をもらうほどになり、三十三歳で処刑された翌月「遺愛集」という歌集が出版される。

(秋人)

その序文に選者の窪田空穂くぼたさんが「彼の歌は純良で無垢で、頭脳の明晰さ、感性の鋭敏さを思わずにいられない。」と書いている。

小学校時代、低脳児といわれた同じ人間を「頭脳明晰、感性鋭敏」と言っている。

島秋人は、どんな人間でも、どんなにだめだと言われる人間でも、みな無限の可能性を持っていることを私たちに事実で痛烈にしめしてくれたのである。」

T君の最近の姿は、まさに、「一つのよい要素が引き出されると他のよい要素がいもづる式に引き出される」ことを実感させてくれるものであり、T君の可能性を信じさせてくれるものです。

今、学力低下問題がやましく、215の中教審で文科相が「ゆとり教育」を柱とした現行の指導要領全面見直しを要請しました。今後おそらく、総合的な学習の削減、指導内容の増大、授業時数確保のための休業期間短縮などが提案されてくるのではないのでしょうか。

しかし、前にも言ったように、いくら制度をいじくっても根本的な解決には至らない気がします。真の問題は、学力の二極化にあり、増え続ける「学びから逃げる子どもたち」をどうするか、そこをつきつめないかぎり状況は何も変わらないと思っっているからです。

子どもたちの中に「学ぶ意欲」が生まれる時。それは結局、「一つのよい要素を引き出す。」ことにつぎるのではないのでしょうか。それによって、「他のよい要素がいもづる式に引き出される」。その実例は、T君、五年のS君、一年のK君、去年卒業したI・T君など、布小の中にもたくさんあります。

ただ、「一つのよい要素を引き出すためには、一方でねばり強い『追求』がなければならぬ」とも思いますが、新しい学力観が踏みまちはえたのは、画一を否定するあまり、「無理しなくていい。あなたが、できるだけでいいよ。」と、追求を放棄したことにあると私は思っています。